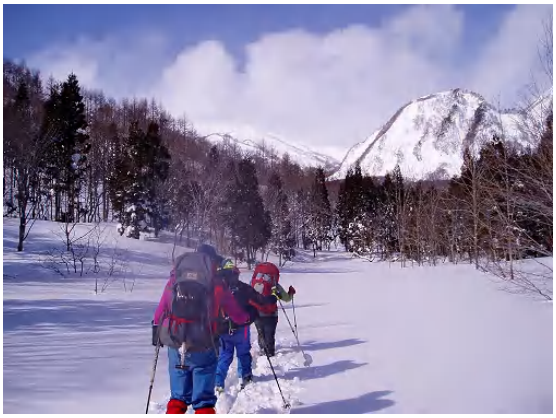
焼石岳（山スキー）

2011 年 2 月 11～13 日
松田他３

２月１１日（晴れ）

諏訪木先生に自宅でピックアップしてもらい、石淵ダム下の駐車場で及川さん、渡邊さんと合流して、胆沢ダムの工事現場内の空き地に車を止め、出発。30 分くらいは作業用道路をスキーを担いで歩くことになるが、工事用車両が作業中であり、気を使って通り抜ける。

道路終点でスキーを履いてスタート。先行する奥州山岳会のトレースに助けられて快調に進むが、気温の上昇とともに次第に雪がべたつき始める。中沼駐車場手前で、銀明水に向かう奥州山岳会のトレースと分かれ、重い湿雪のラッセルが始まる。シールに雪がべったりくっつく最悪の雪で、シールにワックスを塗って雪の付着を防ぐ。前方には天竺山の鋭い山容がなかなか格好いい。



駐車場から平らな林の中をしばらく進み、左に向きを変えて 1 本小さな沢を渡ってから、右折して尿前本沢を渡る。通常は渡れる場所を探すのに苦労するそうだが、今冬は雪が多いため沢はほとんど埋まっており、簡単に渡ることができた。「今日の雪は変だ、まるで春みたいだ。この辺りは粉雪で、もっとふわふわなんだ。

１０年くらい前からおかしくなってきた。」先生と及川さんがさかんに話している。神谷坂という、何やらいわくのある対岸の急登を越え、再びブナ林の中を緩く登って左の台地状の所へ尾根をトラバースしていくのだが、この辺り、本当に地形が複雑で地図読みが難しい。右手に青岩という急な岩峰がそびえ、雪崩を注意しながら斜面をさらにトラバースし、緩い尾根形に上がってさらに小さい窪地を越え、小尾根を乗っ越すと、天竺沢の源流部の登行となる。この頃になると大分雪のべたつきも減ってきて歩きやすくなる。最後の斜面を一登りすると金明水の小屋の屋根が見えた。一階の窓は施錠されていたので、梯子の上を塞いでいる雪を、雪庇を越える時のように切り崩し、二階から小屋に入った。

小屋の内部はまだ新しく、梁や壁の木目が美しい。一階の窓を開けて、みんなで小屋に入る。諏訪木先生と及川さんは早速、倉庫にもぐってデポ品を持ってきた。お酒、ガス、灯油、食料など様々で、豊かな夜が楽しめそうである。及川さんは１ヶ月近くもここに滞在したこともあるそうで、何でも知っているようだ。小屋の石油ストーブを焚いて、宴会を始める。今日は重いラッセルがかなりきつかったので、みんな足はつりはじめ、「いたたたっ・・！」と交互に足を伸ばす。

小屋の外はやけに静かで、「風がやんだ・・・！ナウシカの映画みたいだ！何か嫌な感じがする。」と先生が言う。冬の焼石で風が吹かないのは、かえって気味が悪いのであろう。

とはいえ、結局そんなことも全然関係なく、いつもように延々と飲んで、寝る。

２月１２日（ガス、雪）
予報通りの悪天で、風はさほどでもないが
ガスがひどく視界が効かない。無理だろうなと言いながらも一応、出発。２～３０m登ると稜線であるが、ほぼ真っ白でブッシュがなければ何も見えない。３０分も行かず、これはもう明らかに無理ということで小屋に戻ることになる。確かにこの天気では到底銀明水に抜けられるとは思えない。また小屋に戻り、今度はシートを張って居住エリアを区切り、暖房する。これがなかなか快調で、１０時くらいからまた飲み始める。渡邊さんは料理が上手で、いろいろな美味しいお手軽料理を作ってくれる。仙台麩を使った酒の肴もとても美味しかった。
またギョーザの作り方などもとても参考になった。昼過ぎになるとみんな疲れて、五時頃まで午睡タイム。外は随分風が吹き、雪が積もった。この日は早めに就寝。

２月１３日（曇りのち晴れ）
少し雪が降っているが、視界も効いて風もさほど強くない。雪も大して積もっておらず、往路のトレースが残っている。及川さんは風邪が悪化したようで、具合が悪そうである。さらさらの粉雪で、下りもかなりスキーが走る。先生はさすがにきれいなフォームで、シュプールを刻む。私はかかとを固定しなかったせいもあり、いつにも増して、雪まみれになってしまった。
あっという間に徒渉点に着き、シールを付けて駐車場を過ぎ、つぶ沼への分岐から再度滑る。林道は結構傾斜があって、あっという間にダムの工事現場に着いてしまった。雪のない作業道は、兼用靴では本当に歩きにくそうだ。
登山靴の私は少し楽をして車に戻り、及川さん、渡邊さんと別れて北上に戻る。
冬の焼石の縦走は、悪天に阻まれてできなかったが、また春に来てみたい所だ。

（松田記）

コースタイム
２月１１日
胆沢ダム（９：００）－　金明水避難小屋（１６：３０）
２月１２日　ほぼ停滞
２月１３日
金明水避難小屋（８：３０）－　胆沢ダム（１３：００）

地形図　焼石岳、石淵ダム